2021年度　成安造形大学附属近江学研究所　紀要　第11号

「里山における自然資本の意識化とネットワークのための地域参加型研究」の報告

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員　永江弘之
成安造形大学非常勤講師／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員／京都大学大学院技術補佐員　大原歩

「里山における自然資本の意識化と ネットワークのための地域参加型研究」の報告

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員　永江 弘之
成安造形大学非常勤講師／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員／京都大学大学院技術補佐員　大原 歩

Name:
Hiroyuki　NAGAE　　Ayumi　OHARA

Title:
A Report on a Community-Based Participatory Research Project for Raising Awareness and Networking in Relation to the Natural Capital of the Satoyama

Summary:
Herein, we report on our research activities conducted in Moriyama Village, which is situated at the foot of Mt. Hira in Otsu City, Shiga Prefecture. Together with local residents, we investigated the wisdom, technology, and life of a satoyama village that coexists with nature. Through the practice of this community-based participatory research, we also examined the value of natural resources and the issues they face, as well as the ways in which social and community cooperation can be used to connect them to the future.

第一章　はじめに

里山は、それぞれの地域の気候や風土がもたらす農地や森林、水辺などの多様な自然と、地域の人々の生活・生業・信仰、年中行事などが結びつきながら、地域固有の文化や生態系が形成されてきた。

里山は、私たちの生活の中であまりにも身近で、そして当たり前すぎたがためか、その存在意義そのものが問われることは少なかった。今日、近代化や都市化により里山をとりまく環境は大きく変化している。薪や炭の需要が激減したことによる薪炭林の放置、過疎化や高齢化などによる農地の管理放棄、大規模かつ画一的な開発の進行による地域固有の景観の消失、生物多様性の低下、ごみの投棄による環境汚染など里山をめぐる問題は深刻である。そして、都市近郊のニュータウン開発によって移入者が増加する一方で、集落組織を通して伝統的に里山の利用や管理に直接関わってきた地域住民は減少の一途をたどっている。

一方、一九八〇年代以降になると、里山保全をめぐる活発な市民活動が各地でみられるようになり、里山の多様な機能と意義が認知され、行政や学問の

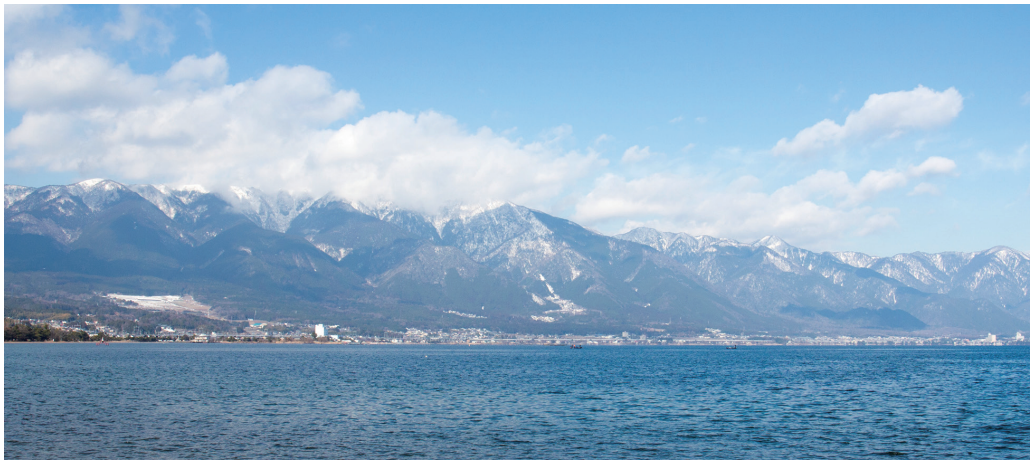

写真１　研究フィールドの比良山麓を和邇浜より遠望する

分野においても里山に対する関心が高まった。

自然科学および社会科学双方の観点から様々な里山研究が行われ次第にその成果が蓄積されるようになってきた。現在は、さらに里山における生態的な意義と文化的な意義を融合するための学際的な研究が求められている[註1]。

そうした背景の中、本稿は筆者（永江、大原）が科学研究費助成事業（基盤研究（B））「里山における自然資本の意識化とネットワークのための地域参加型研究」（研究代表者：深町加津枝／京都大学。以下、「里山科研」という[註2]）の研究分担者・研究協力者として、滋賀県大津市八屋戸の守山地区を中心とした比良山麓の里山のフィールドで、「地域固有の里山の知恵や技術を今日に活かし、未来につなげていくための社会・地域連携をいかに行うか」という視点で、地域住民の方々と共に、価値や課題を認識し、共有するプログラムとして取り組んだフィールドワークとワークショップおよび調査・研究について報告する。（写真1）

第二章　調査・研究の目的

二－一　「地域参加型研究」とその成果

フィールド調査で得た地域資源・自然資源の価値や情報を地域の人々と共有する機会は、簡単に得られるものではない。一方的に情報公開するだけではなく情報を分かち合い、情報を活用するには、地域と相互的な関係を継続しながら共にその機会を作ることが望まれる。

本研究では、研究代表者である深町が同地域に在住し、自身の研究フィールドとして地域住民との関係性を育んできたことが大きく作用している。研究開始当初から、深町を通して地域団体や個人の多くが研究に対して関心を持ち、協力的で主体的に調査に関わった。「地域参加型研究」として研究活動を共にすることで、その成果を還元し共有する地域の人たちや団体、活かしていく場面などを具体的に意識しながら研究を進めることができた。そして、研究成果は今後地域で活用できるように、よりよく地域に伝わり、より発展的で継続的な関わりを生み出すような企画やデザインが求められた。

本稿は、永江と大原が、里山科研の一環として地域の各種団体と取り組んだ「地域参加型研究」を報告する。第三章は「活動拠点としての古民家五郎助（古民家再生、活用）」、第四章は「五感体験アンケート」、第五章は「地域めぐるスタンプラリーと里山資源カード」、第六章は「比良山麓の石の文化サイクリングマップ」である。「地域参加型研究」として多くの地域団体、個人の方々に協力いただいた。それぞれの章で関わりのある団体を紹介する。

二－二　調査対象地

調査対象地の比良山麓一帯（ここでは旧志賀町の範囲）は、西に蓬莱山や比良山系の一〇〇〇メートル超えの山並みが連なり、東には琵琶湖（水面標高約八十メートル）が広がっている。山からの急傾斜地を流れる諸河川の扇状地の上の狭い範囲に田畑や宅地、京都と北陸を結ぶ西近江路（県道）が走っている。

そうした地勢により、冬には急斜面を駆け降りるように吹く比良おろしと呼ばれる強風が風害を引き起こし、また、大雨が降ると土石流が頻発し河川氾濫や水害などの自然災害と向き合ってきた地域である。一方で、雄大な比良山系から得られる豊富な森林資源を建築材や燃料、食材などとして利用し、また、土石流などで地表に露出した石を石材や庭石として利用し浜から舟運で琵琶湖湖岸や京都などの消費地に向けて運ぶなど、自然資源の恵みを産業にしてきた。（写真2・3）

調査の中心地となる大津市八屋戸の守山地区は、ＪＲ蓬莱駅にほど近く八屋戸に位置する約二三〇戸の農村集落である。比良山麓の東側の木戸学区に属し、古くは守山村と北船路村とに分かれていたが、明治七年（一八七四）五月に両村が合併し八屋戸村となった[註3]。元々、木戸との境界である野離子川の河口付近に集落があったが度重なる土砂災害により、現在の場所に集落を移転したと伝わっている。

写真 2　山と湖の間の狭いエリアに里山が広がっている（守山地区）

第三章　活動拠点としての古民家五郎助（古民家再生、活用）

三－一　概要

里山科研では、「地域参加型研究」の拠点となる守山地区内の古民家をお借りすることになった。この古民家は築一〇〇年以上がたち、隣接する土地へ新築ができる前までは母家として使用されてきた。

写真 3　浜まで続くかつての石出しの道（守山地区）

茅葺屋根の平屋で、田の字型の座敷、たたき土間、土間から続くお台所にはカマド、薪で沸かす五右衛門風呂が現存している。守山地区の旧集落で一番山手に位置し、敷地内には、江戸時代頃に引水された用水路とカワトがあり、守山の昔ながらの暮らしをみることができる。家主Mさんは、守山地区で生まれ育ち、長男として地域の伝統的な年中行事や、祭事、自治活動に関わり、農作物を育ててきた。母家を何かに活用できないか、と家主Mさんに相談したところ、賛同いただき、里山科研と守山里山の会の共同で再生・活用することとなった。

この章では、この古民家を地域の暮らしの伝承の場として活用するため家主Mさんの屋号を用いて『古民家　五郎助（ごろすけ）』と名づけ、守山里山の会と共同で行った再生・活用への取り組みを報告する。

今年度で里山科研は終了するが、家主Mさんのご厚意と、地域の活動拠点として根づき始めたことから、この『古民家　五郎助』を活用した活動は継続していくことになった。守山の里山研究や活動、人々の交流の場として活かしていきたい。（写真4～9）

写真 5　古民家五郎助の玄関からたたき土間へ

写真 4　古民家五郎助の外観。奥の旧母屋を活動拠点として再生し活用する

写真 7　玄関前に敷き詰められた守山石が雨に濡れて美しい

写真 6　古民家五郎助は守山集落の一番山手で、集落の中心を通る石出しの道、山行きの道に沿って位置している

写真 9　タイル貼りの五右衛門風呂（使用不可）

写真 8　手入れをして使えるように再生したおくどさん

三－二　「守山里山の会」について

「守山里山の会」は、里山での暮らしの知恵や文化を学ぶ有志の会。守山地区の旧・新住民により構成されている（二〇一九年調査時会員数三十二名）。守山地域の自然や歴史・文化と結びついた場所や、「あぶらぼん」と呼ばれるキノコや「守山石」と呼ばれる石材などの自然資源、また地元にある森を利用してつくった石出車・トンボ車・竹籠など地域の暮らしや生業を支えた民具などを活用するためのワークショップの開催や、手づくり小物等の販売などの活動を行っている。

三－三　古民家の再生・活用に向けた取り組み

（一）実測調査

古民家は、当初柱や床、屋根瓦の損傷がはげしかったため、本研究活動の中で修繕・再生することを家主や守山里山の会へ提案し、実測調査、実測図面の作成、床板三間分の張り替え、補強する作業をワークショップ形式で行った。民家の実測調査は、成安造形大学住環境デザインクラス卒業生四名が実施した（二〇一九年七月）。家主から古民家についての聞き取り調査をし、損傷部分確認、再生ポイントの整理などの情報の取りまとめ、民家図面の作成が行われた。（図1）

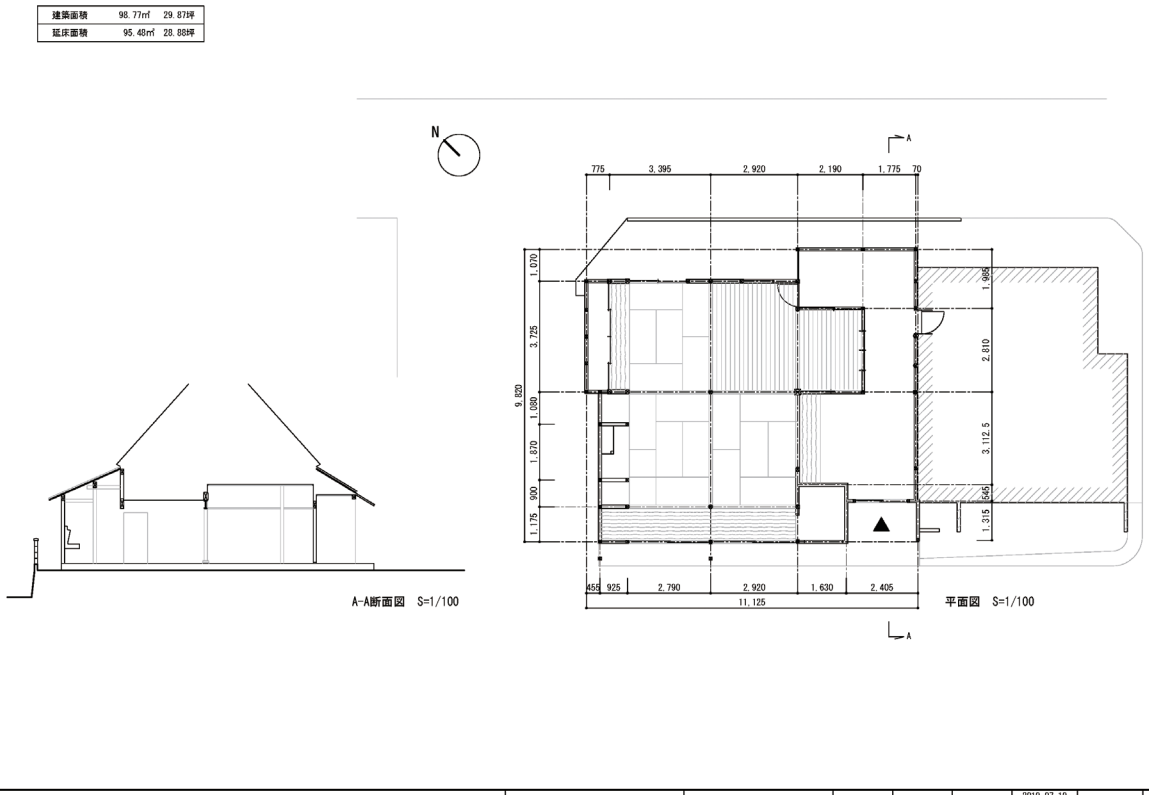

図1　古民家五郎助の実測図面

（二）古民家再生ワークショップ

古民家の再生ポイントを整理し、瓦屋根の修繕、家屋周りの掃除などが守山里山の会有志や協力者により進められた。守山里山の会とのワークショップでは、床材の張り替え、床材への柿渋塗りを実施（二〇二〇年二月～四月）。床下工事の際には、柱の基礎に守山石が使用されていることがわかった。床材の塗料は昔はベンガラを塗っていたことが地元大工の古老からの聞き取りでわかった。その後も、土壁の修復についての土採集や、守山里山の会の女性メンバーからのカマドでお米を炊きたい！　という希望により、カマド周りの掃除、台所の窓の改修など、地域団体と企画を共有しながら活動を進めている。（写真10～13）

写真10　床板を剥がすと守山石の基礎が並んでいた

写真12　床板を張り直し柿渋を塗るワークショップ

写真11　柱の基礎の守山石

写真13　活動拠点としての環境が整っていく

（三）展示発表スペースの整備

古民家五郎助を研究成果の発表の場として活用するために、壁二面の上部にピクチャーレールを設置し、古民家の雰囲気を妨げないように必要な時だけ有孔ボードに金具を取り付けて展示ワイヤーで吊したり連結して展示壁面として使えるようにした。有孔ボードを利用することで作品の二段掛けなど臨機応変に展示レイアウトを変えられるように工夫した。また、延長コードで簡易的にライティングを可能とした。作業には家主Mさんの協力が大きな助けになった。

古民家五郎助を地域コミュニティの拠点として今後も活用していく上で、集会やものづくりなどのイ

ベントだけではなく、作品や成果を発表する展示スペースとして活用の幅を広げた。

（四）民具の収集・調査・展示の計画

子どもの頃に山から石を運搬する「石出し作業」の経験がある大工の石塚定二郎さんは、守山の歴史や暮らしに詳しく、地域の歴史をまとめて執筆し、公民館講座の講師や、「守山里山の会」の顧問も務められていた。里山科研の研究でも、里山の先生としてたくさんの行事を指導いただき、信頼され慕われていた。

永江と大原は、二〇一六年に文化誌『近江学』第九号の記事[註4]の際にも、石塚さんから山仕事や石出し道のこと、守山の歴史や祭りについて多くの聞き取り・取材を行っている。石塚さんのご自宅にある作業場兼倉庫には、石塚さんが復元した守山石を産出する時に石を運搬する石出し車三台や大工道具、琵琶湖や河川の漁業の民具などが多数収蔵されていた。

また、守山地区には、山仕事や田仕事、衣食住の暮らしに関わる民具を所蔵する家もあることがわかってきた。

そうした守山地区独自の石出しの道具や里山の暮らしに根付いた民具を収集し、調査し、古民家五郎助などで展示を行い、文化を継承していこうということになった。

守山里山の会が民具収集・民具整理を実施し、里山科研が民具調査・記録を行った。

手順としては、守山の民具の戸籍をつくる（撮影・聞き取り・記録）、手入れ・保管、展示の流れで実施する計画を立てた。

民具の収集・調査・保存方法を学ぶため、二〇二〇年一月に二か所の先進地区を訪ねて研修を行った。午前に田上郷土史料館の収蔵庫を見学。東郷正文氏（田上郷土史料館館長・真光寺住職）より史料館の衣生活用具が二〇一九年二月に国の登録有形民俗文化財に指定された経緯についてお話しいただき、須藤護氏（民俗学者・龍谷大学名誉教授）から民具の収集・保存・調査に関するレクチャーを受けた。午後からは、琵琶湖博物館にて、渡部圭一氏（当時琵琶湖博物館主任学芸員・里山科研研究分担者）から、琵琶湖博物館の概要解説後、地下の民具収蔵庫を見学した。田上地区や琵琶湖博物館にはない山や石出しの仕事の道具が守山地区にはあることがわかり、守山地区でしか収集できない民具資料があることがわかったことで、守山里山の会のみなさんのモチベーションが上がったことを感じた。（写真14～18）

石塚定二郎さんの復元した石出し車や、民具を活用するために、石出し車の使い方や、石出しをしていた当時の様子について聞き取り（勉強会）を行った。また、各家にある民具を古民家五郎助に搬入した[註5]。（写真19）

民具の展示は、古民家五郎助を会場に「守山むかしのくらし展」を実施した。開催は二〇二一年十月十四日、守山自治会が主催するスタンプラリーと同

写真 14　田上郷土史料館館長の東郷正文氏によるレクチャー

写真 15　資料整理について学ぶ

写真17　琵琶湖博物館にて渡部圭一氏のレクチャー

写真16　田上郷土史料館を視察

写真19　石塚定二郎さんが復元した石出し車を囲み使い方や当時の様子を聞く

写真18　琵琶湖博物館収蔵庫を視察

日にし、多くの人が散策する際に立ち寄ってもらえるようにした。（次節三－四（三）参照）

三－四　古民家五郎助の展示スペースとしての活用実践

古民家五郎助を地域コミュニティの交流の場、活動拠点として集会やものづくりイベントなどに活用する以外に、「展覧会」など作品や成果の展示発表の場としての活用を企画し開催した。

（一）展覧会「五箇祭展」開催

主催：科研「里山における自然資本の意識化とネットワークのための地域参加型研究」
会期：二〇二〇年五月二日（土）～三日（日）
　コロナ感染対策のために対象を地域の方、守山里山の会のみに絞って公開。
展示内容：
・写真展「守山の風景～五箇祭」（永江弘之）
・パネル展示「五箇祭いろはかるた」（山形歩）
・映像上映「五箇祭二〇一〇年」五十三分（山形蓮）

五箇祭とは、西近江路（旧北国海道）沿いの北船路、守山、木戸、荒川、大物の五つの集落を舞台に五月に行われる樹下神社（滋賀県大津市木戸）の例祭。

写真展は、二〇一六年に文化誌『近江学』第九号の記事[註4]のために五箇祭を取材した際の写真より二十点をA2サイズで印刷しB2パネル展示した。

「五箇祭いろはかるた」作者の山形歩さんは、守山地区出身で成安造形大学卒業生。本作品は二〇一

○年度の卒業制作作品。Ａ４サイズの絵札と読み札（祭の解説付き）全ての原画パネルを展示した。

映像「五箇祭二〇一〇年」編集の山形蓮さんは、大物地区出身で滋賀県立大学卒業生。本作品は二〇一〇年の五箇祭で、本稿執筆の大原をはじめ協力スタッフが五つの集落にそれぞれ密着し、同時並行して進行する祭に同行し撮影した取材映像を編集した記録映像作品。大型モニターで上映した。

（二）里山研究展示 vol.1「五箇祭展」・古民家五郎助のお披露目

主催：科研「里山における自然資本の意識化とネットワークのための地域参加型研究」
会期：二〇二〇年八月八日（土）～十日（月）
展示内容：
・写真展「守山の風景～五箇祭」（永江弘之）
・パネル展示「五箇祭いろはかるた」（山形歩）
・映像上映「五箇祭二〇一〇年」五十三分（山形蓮）

※関連企画として、大物文化祭にて「五箇祭展」を開催した。
会期：二〇二〇年十一月二十三日（月）
会場：大物公民館
展示内容：
・写真展「守山の風景～五箇祭」（永江弘之）
・パネル展示「五箇祭いろはかるた」（山形歩）
・映像上映「五箇祭二〇一〇年」五十三分（山形蓮）
（写真20～22）

写真 20　五箇祭展　写真展示

写真 22　五箇祭展　映像鑑賞

写真 21　五箇祭展　カルタ展示

（三）守山里山の会主催「古民家五郎助　守山むかしのくらし展」

主催：守山里山の会
後援：科研「里山における自然資本の意識化とネットワークのための地域参加型研究」
　総合地球環境学研究所「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」
会期：二〇二一年十一月十四日（土）
展示内容：
・民具：石出し車、ハシゴ車、石工道具、竹籠、柿渋紙の籠、漁具、茶壺、明治期の教科書など
・掘り炬燵、おくどさん、薪風呂、じゅんじゅん用ちゃぶ台
・チャナメツムタケ（アブラボン?）の資料
・近州音頭「守山版」の資料
・映像「守山にある山林の地名」（長岡野亜監督・出演：石塚定二郎氏）

（写真23～29）

写真23　カマドでごはんを炊いた

写真24　昼食の準備

写真25　手づくりの地元の味

写真26　昔の道具などを展示

写真 27　石工の道具など

写真 28　復元した石出し車の展示

写真 29　巨石の運搬に使っていた四つ輪

第四章　五感体験アンケート

四－一　概要

五感体験アンケートは、上田洋平氏（滋賀県立大学地域共生センター講師、心象図法の提唱者）考案の「地域住民に子供の頃からの五感体験、身体感覚を思い出して書き出していただき、その地域の生活文化を概観できるようにする調査手法」である。

二〇一〇年度～二〇一二年度に取り組んだ近江学研究「生活文化の聞き取り調査、及び、仰木ふるさとカルタ制作」では、滋賀県大津市仰木地区で「仰木ふるさと五感体験アンケート」を実施し、一次資料として整理し活用した。

本研究では「守山ふるさと五感体験アンケート」として実施した。二〇一九年八月に守山地区の地蔵盆（地蔵巡り）に合わせて「守山ふるさと五感体験アンケート」の紹介および協力をお願いするパネルなどを展示した。守山公民館の壁面をお借りして、主に「仰木ふるさとカルタ」の時の成果物を例として展示し、本研究の概要とアンケートの趣旨などを紹介した。五感体験アンケートの記入例、まとめ冊子「仰木ふるさと物語」、「五感体験のコメントカード」、仰木ふるさとマンダラの例などを展示した。

地蔵盆（地蔵巡り）やその後の夏祭りなどの地域のイベントや地域住民が集まる機会に順次配布して記入していただく予定だったが、コロナ禍による自粛や中止などで計画通りに進められず限られた成果となった。（写真30）

写真 30　地蔵盆に合わせて設置した五感体験アンケートを紹介し協力をお願いする展示パネル（守山公民館）

四－二　守山ふるさと五感体験アンケートの質問項目と記入例

アンケートの質問項目は、仰木でのアンケートをベースに、他の研究分担者への情報提供を意図して「方言や唄」や「当地におけるキノコについて」「守山地区の一年の暮らしの中の行事」の項目を追加した。以下が質問項目と記入例である。

・年齢
・性別
・守山地区に何年くらいお住まいですか？
・支障がなければ、ご住所とお名前をお教えください。

一．今も目に浮かぶ、当地のなつかしい風景、情景、建物や風物がありましたら、いくつでもかまいませんので、思い浮かぶだけご記入ください。
例・昔は麦わら葺きの屋根ばっかりやった。瓦屋根はなかった。（〇〇才の頃）
・一九〇〇（昭和〇〇）年頃まで、石出し車で大きな石を運んでいた。

二．耳に残る音、なつかしい音、当地で聞こえた印象深い音や声がありましたら、いくつでもお教えください。どんな些細な音でもかまいません。
例・夜でも水車のゴトンゴトンという音が聞こえとった。（昭和〇〇年頃）
・小学生の頃、石出し車のギシギシという音で、父さんが帰ってくるのが分かった。

三．なつかしい匂い、当地ならでは、またはその頃ならではの匂いだと思われるものがありましたら、いくつでもお教えください。
例・家の中に入ったら、どの家でも牛のにおいがした。（昭和〇〇年頃まで）
・小学何年生頃まで、朝は、おくどさんでごはんを炊く匂いがした。

四．今でも手足によみがえる感触、なつかしい手触りや肌触り、また、熱さ冷たさ、暑さや寒さ、痛さ、重さなどの体験がありましたら、いくつでもお教えください。
例・わら草履の冷たい履き心地が気持ちよかった。
・夏は川で魚つかみ。魚のヌルヌルした感触が忘れられない。

五．思い出の味、忘れられない味や、当地ならではと思われる味や食べ物などがありましたら、いくつでもお教えください。
例・よその家の干し柿をこそっと取って食べとった。
・村総出の「道づくり」で食べたお弁当、谷川の水で沸かしたお茶はおいしかった。

六．当地で使われている方言や、言葉の独特な使い方、また、ことわざや唄、はやし言葉、言い回しなどがありましたら、いくつでもお教えください。
※田植え歌や、石出し仕事の時、年中行事などで唄った歌などがあれば、ぜひ教えてください。
※校歌など今は歌われなくなった当地の歌などありませんか？

七．当地における「キノコ」について教えてください。
①当地で生える（生えていた）キノコで実物を知っているものを教えてください。
②その中で食べたことがあるものを教えてください。
③その中で自分が採ったことがあるものを教えてください。
④「あぶらぼん」と聞いて思いつくこと、思い出すことはどんなことでしょうか。

八．守山地区の一年のくらしの中で、地域やご家庭で行われている行事をお教えください。今も続いている行事でも、もう行われていない行事でも、些細なものでもかまいません。いくつでもかまいませんが、無理のない範囲で教えてください。行われる時期や特徴的な「使う道具」「お供えするもの」など内容も少し書き添えていただくと、より参考になります。
※五箇祭のことや、その他の祭行事のことなど、また季節ごとの節目の行事など。
例・毎年〇月頃に〇〇の御札をもらいに行って貼り替える。
・一月〇日　〇〇〇でどんど焼き。

九．その他、当地の暮らしの中での体験について、特に思い出されたことがありましたらお教えください。絵や図で示していただいてもかまいません。別紙添付でもかまいません。

・思い出すヒント・キーワード＝「衣」「食」「住」「冠婚葬祭」「結・村組織・コミュニティ」「遊び」「学

校生活」「生き物」「風景」「田畑仕事」「山仕事」「石出し仕事」など

四－三　守山ふるさと五感体験アンケートのまとめ

アンケートに記入いただいた内容をテキスト化したものを年齢降順で掲載する。質問項目は略記とした。回答された内容や漢字等の表記は、明らかに誤記と思われる部分は修正したが基本的に手書きの記入に準じた。

■九十二歳　女性
守山地区におよそ八十六年間住んでいます。（六歳までは京都市在住）

一．**目に浮かぶ風景**
・若宮神社の広場で夜、映画会が催され、筵の上に座って鑑賞した（昭和二十年代）。
・田んぼの虫を駆除するために行われた「虫送り」という行事があった。松明（たいまつ）を持って田んぼの畦を歩きながら虫を駆除するのである。

二．**耳に残る音**
・地蔵盆に私の父などが所属する講の人たちが、太鼓の音に合わせて念佛か音頭かを歌っていた。
・小学生（高学年）が、夜、火の用心回りをした。拍子木を首にかけて「火の用心ご用心」と唱えながら集落を回った。
・川に大きな水車を回して米をふむ。水車の回る音、杵の音がした。

三．**なつかしい匂い**
・お茶の葉を摘んで蒸してもんで、むしろの上に広げて乾かす。私の家では、十年位前まで毎年やっていた（お茶の葉のいい香り）。
・牛を飼っている家では、牛小屋の中の汚れた敷き藁を外に出して積んであった。雨が降ると独特のいやな匂いがした。

四．**手足によみがえる感触**
・川の水で米を洗い、ご飯を炊く。時には下手の方のしょうず（わき水）の所まで持っていって米をといだこともある。
・お風呂に水を張るのが小学校高学年位の子どもの仕事で、川から汲んできたバケツの水を高い窓からお風呂に入れるのが大変だった。

五．**思い出の味**
・夏休みに湖で泳ぐ時、胡瓜や茄子を持って行き、それを投げてそこまで泳ぐ。あとはおやつ代わりに食べたことを想い出す。
・そら豆を炒ったり、家で作ったかきもちを焼いたりする時の香ばしい香り。それを食べた時の味は忘れない。

六．**方言、唄、言い回し**
・「おしまいやす」これは夕暮時の挨拶「仕事を終わりましょう」という意味の挨拶。
・「ほっこりした」は今、ＴＶなどで言われている意味と異なり、仕事で疲れた様子を表す言葉として使われている。

七．**当地における「キノコ」**
①**実物を知っている**
・しめじ、黄しめじ、あぶらぼん
・松茸（出る場所を知っている人は松茸の巣といって、人には明かさない）

②**食べたことがあるもの**
・しめじ、黄しめじ、あぶらぼん

③**自分が採ったことがあるもの**
・黄しめじ、あぶらぼん

④**「あぶらぼん」と聞いて思い出すこと**
・学校から帰るとすぐ篭を持って裏山へ行き「あぶらぼん」を採りに行った。傘の開いた物より開いていない方が、お汁の具としておいしかった。

八．**守山地区の一年のくらしの中の行事**
・一月十五日　どんど焼き。お餅を焼いたり、書き初めを燃やしたり。
・三月十日　金比羅例祭。こんぴらさんに参り、お饅頭やセルロイドの飾りのついた飾り物をもらうのが楽しみだった。
・五月五日　五箇祭。木戸、守山、北船路、荒川、大物の五集落が集まって、樹下神社や下の御旅所で行われる。
・六月　虫送り。早苗につく害虫を追いはらう行事（前述）。
・九月一日　二百十日。氏神である若宮神社でお百燈を上げ、盆踊りを行う。

九．**その他**
・「守山石」は、庭園をかざる石として県内だけでなく、京都の方でも知られており、庭石を山から出してきて、浜辺におろし、船で各地へ売りさばく、それを生業とする家が数軒あった。浜に出した庭石には、それぞれの庭石屋の印が墨汁で書かれていた。

■七十九歳　女性
守山地区におよそ五十五年間住んでいます。

一．**目に浮かぶ風景**
・昭和四十一年頃、江若鉄道で浜大津まで通勤していたが、帰りの列車から見える景色がとても

美しかった（田んぼ～湖岸～琵琶湖～対岸の山～空と遮るものなしで）。
・下水道ができるまで、お風呂は薪で沸かしてたので、山に行って木を切って運んでたが、熊も猿にも出逢わなかったので、山仕事は楽しかった。

二. 耳に残る音
・琵琶湖で捕れた魚を売りに来た人の声　〝ごりいりまへんか～〟

三. なつかしい匂い
・稲を刈り取った後の田んぼで、枯れ草を燃やす煙の匂い。

四. 手足によみがえる感触
・冬、脱水機能がなかった頃、干した洗濯物がすぐそのまま凍ったこと。

五. 思い出の味
・お寺の行事で料理上手な姉さんが作られた小豆と小いもの〝いとこ煮〟。

六. 方言、唄、言い回し
・自分より年上の女の人を、おばさんと言わずに〝ねえさん〟又は名前で呼びかけること。やさしい雰囲気が感じられる。
・夕方、畑仕事などが終わって家への帰り道、出逢った人に〝おしまいやす〟と声を掛けた。
・おあがりやす。にいさん。

七. 当地における「キノコ」
①実物を知っている
・あぶらぼん
・こむそう（こもそう?）（白く深いあみがさのような形）
②食べたことがあるもの
・あぶらぼん、こむそう
③自分が採ったことがあるもの
・あぶらぼん、こむそう
④「あぶらぼん」と聞いて思い出すこと
・村はずれから少し入ったところにいっぱい生えてて、茶色で表面がヌルッとした感じで、みそ汁に入れたらおいしかった。

九. その他
・山へたきぎ用の木を切りに行ったり、川の水を使ってカレーを作って食べたこと。ふきやわらびを採りに行ったこと。遠い昔の楽しい思い出（昭和五十五年頃?）。

■七十七歳　男性
守山地区に　七十七年間住んでいます。

一. 目に浮かぶ風景
・この地区も麦わら葺きの屋根が多かったので、中学生の頃から高いところは平気だったのでよく手伝いに行きました。

二. 耳に残る音
・家の裏は川が流れているので年中水音を聞いて育ったので、台風の時などは水を止めるので少し淋しく思いました。
・風呂のまきのパチパチという音も懐かしいです。

三. なつかしい匂い
・小学一年頃は我が家でもおくどさんでご飯を炊いていたので、その匂いで起きていました。

四. 手足によみがえる感触
・冬は小学校に行く国道も腰まで雪が有り、消防署（団）の人達に雪かきをしてもらいました。
・夏は学校帰りに小川でハスという魚を採ったりしながら帰りました。

六. 方言、唄、言い回し
・相手に対して貴方達と言うのを『わんらは』と大じいさん達が使っていました。

七. 当地における「キノコ」
①実物を知っている
・しめじ、松たけ、ましめじ、白しめじ、ねずみしめじ
②食べたことがあるもの
・上記全部
③自分が採ったことがあるもの
・上記全部
④「あぶらぼん」と聞いて思い出すこと
・みそ汁をよく食べました。

八. 守山地区の一年のくらしの中の行事
・あたん講。正月、五月、九月。（神様用の御膳を作り、精進料理を供えて、当番制の順に各家でおまつりをする）御膳は順番に次の家へ回してゆく。

■六十九歳　男性
守山地区におよそ三十五年間住んでいます。

一. 目に浮かぶ風景
・小屋の横に外トイレと柿の木（あまい、小さい実）が有りましたが、私の車を入れるガレージになりました。

二. 耳に残る音
・祭での歌声と鉄棒引の音

三. なつかしい匂い
・ゴリを煮る甘からい匂い

四. 手足によみがえる感触
・雪かきの重さ
・夏、家を通る風のすずしさ

五. 思い出の味
・かしわのすき焼き
七. 当地における「キノコ」
④「あぶらぼん」と聞いて思い出すこと
・妻が子供のころよく食べたといっていた
八. 守山地区の一年のくらしの中の行事
・八月ころに家の畳をすべて上げ 1 week おいていた。父が亡くなってやめた。

■六十八歳　男性
守山地区におよそ八年間住んでいます。
一. 目に浮かぶ風景
・家の周り、田畑の周りに敷き積まれている石積に当地の歴史を感じました。
七. 当地における「キノコ」
④「あぶらぼん」と聞いて思い出すこと
・「あぶらぼん」という言葉は初めて聞きました。

■六十七歳　男性
守山地区に　六十七年間住んでいます。
一. 目に浮かぶ風景
・牛を使っての農作業。春（田植え迄の作業）・秋（稲運び）。
・結婚式、披露宴、全て家で。S40年位迄?
・江若鉄道。～S49年
・守山公民館は、旧木戸小学校八屋戸分校（一～二年、守山、北、南船路の・・　S35年位?）
・農家は牛、にわとり、やぎ、ぶたを飼っていた。～S33年頃
・秋、もみの乾燥はむしろの上で日干しを。
・手植えの田植え（二～三軒共同で）
二. 耳に残る音
・秋、脱穀機まわすため発動機の音。S35年位（ポン、ポン、ポン、）
・手動式（足踏み式）脱穀機の音（ガングリ、ガングリ、ガングリ）。S33年位
・江若鉄道の警笛（プォーン）～S49年
三. なつかしい匂い
・となりがおとうふ屋さんの為、豆腐→油あげにする臭い。S35年位?
・道に牛のふんが沢山。S30年代
四. 手足によみがえる感触
・ハチの巣、かまって刺されたときの痛さ→治りかけのカユミ。
・地下水の湧いているところに素足をつけて、あまりの冷たさに痛くなった。
五. 思い出の味
・小学生の時、野菜サラダにかけたマヨネーズの味
・小学生の時、チキンラーメンの味
・共同田植えの昼飯（田んぼで）。酢飯に紅しょうがが入ったバラ寿司
・家でつんだ茶、家で作ったお茶（ばん茶）、家で作ったうめぼし、紅しょうが、つけもの、ナス、キュウリ、スイカ（夏）、トマト、柿、いちじくetc
六. 方言、唄、言い回し
・二百十日の盆踊りの中で「おどらんかぼちゃは、いんで寝され（おどらない人は帰って寝て下さい）」と音頭をとっておられた。
七. 当地における「キノコ」
①実物を知っている
・マツタケ、アブラボン、シメジ、シイタケetc
②食べたことがあるもの
・マツタケ、アブラボン、シメジ、シイタケetc
③自分が採ったことがあるもの
・マツタケ、アブラボン、シメジ、シイタケetc
④「あぶらぼん」と聞いて思い出すこと
・開いている物より閉じている物の方が汁物に入れたときの味が
八. 守山地区の一年のくらしの中の行事
・一月　山の神さんでどんど（氏子）
・一、五、九月　あたご講。上、中、下、浜講に分かれてる。中→お光（ローソク）毎日順番で（四ツ辻）当屋一～三日／毎月。順番でお酒でおもてなし＋α
・日待ち、山戻り、皆頭祈り。北の上当家、北の下、南の上、南の下。当家（当番）家、お茶、お菓子で。床の間にローソク、サカキ一対立てて。
・年末に「もち花」「鏡もち」を作って神棚に→カキモチにして後日素焼きにして食する。
九. その他
・お寺でのたく児所へ。～S33年
・春、秋、農閑期、お寺で共同炊事→各家、家族分もらって帰る。S35年位迄
・祖母から常々「ぼんよ、男は手に職（技術・資格）をもたなあかん」とよく言われました。→自動車業界へ→整備士や販売士、保険、溶接etc資格取得。
・父親の休みのとき無免許で、父親の車に…守山内を…。

■六十六歳　男性
守山地区に　六十六年間住んでいます。
一. 目に浮かぶ風景
・くずやぶきの家
・天井裏のアオダイショウ（主（ぬし）だからさわってい

けない↑母。時々でてくる↓子供のころ）
・つばめ（家の?部をきりぬいて出入り）
・五月に春の道つくり（弁当持ちで）あり。その夜当家ですきやき+お酒をした。

二. 耳に残る音
・川の水の音
・水車（ギーギーギー、ガタンゴトン）。米を精米する時。ぬかは、ぬかづけ、肥料。
・ニワトリ（時々ヘビにやられる）↓卵や肉として。小学生の時に離れるときにつらかった。すきやき、かしわ+家の野菜で炊く。

三. なつかしい匂い
・牛のにおい。ふん。
・雨の日にせきた（せった）をはいていった時、ふんも流れてきた。

四. 手足によみがえる感触
・雪がたくさんふって、ふみつけた。
・アユをつかんだ時の生ぐささ。
・父母のものをとったりした。

五. 思い出の味
・海の生もの
・茶園もある↓茶つみ
・肉はにわとり、くじら。
・アユ、ゴリ、さんしょうとしょうゆで巻き寿司、さばずし。

六. 方言、唄、言い回し
・伊勢音頭（祭の時）

七. 当地における「キノコ」
①実物を知っている
・マツタケ、アブラボン
②食べたことがあるもの
・マツタケ、アブラボン
④「あぶらぼん」と聞いて思い出すこと
・マツタケ、アブラボンを父ととりに行ったけど、とれなかった。

八. 守山地区の一年のくらしの中の行事
・しじみが足でとれた。浜（島より南側）↓入り江があり和舟が一～二そうとめてあった。松の木が一本たっていた（迂回する必要があった）。
・時代劇の撮影に使われた。

■六十四歳　男性
守山地区に　六十四年間住んでいます。

一. 目に浮かぶ風景
・家には、農耕用の牛がいた（S35ぐらいまで）。牛小屋は今は物置となっている。
・風呂の水は、バケツで池からくんできた。タキ木で風呂を沸かした。子どもの仕事だった（S33～34ごろまで）。
・「おくどさん」
・田植で田舟で苗を運んだ。
・江若鉄道で中学校二年まで通学した。乗り遅れたときは、線路を歩いていた（S45）。

二. 耳に残る音
・大型トラックが八屋戸橋の上を通るたびに、ゴトンガタンと大きな音が家の中までひびいた。（国道一六一号線）バイパスができ、少なくなった。

三. なつかしい匂い
・くわがた虫を採りに山に入ったとき、樹液のすえた匂いがした。
・稲を稲木からおろす時、乾燥した稲の匂いがした。

四. 手足によみがえる感触
・浜で水泳をした時、素足に石がやけて熱かったこと。水の中でも石ころがころころと足の裏に当たって痛かったこと。（この辺りは、砂浜でなく石ころだから）
・ムカデにさされ痛かった（ムカデ多い）。

五. 思い出の味
・干し柿、干し芋（自宅で作っていた）
・イタドリのすっぱさ
・エダマメと栗を一緒にゆでて食べた。

六. 方言、唄、言い回し
・「～しゃいやぁ」（しなさい）
・「伊香立方面の空が黒くなったら、雨が降る」…山の西南方向を見て天気予報。
・台風では、通過後の吹き返しがこわい！

■五十七歳　女性
守山地区におよそ三十年間住んでいます。

一. 目に浮かぶ風景
・裏の森の中で子供達が秘密基地をつくって遊んでいた（平成元年頃）。今は森の中に入る子供がいない。

二. 耳に残る音
・夜中にJR湖西線のアナウンスが聞こえる。
・夏は朝夕にひぐらしが鳴くのが天国のよう。

三. なつかしい匂い
・冬は近所のまきストーブの煙の匂いが朝外に出るとする。
・夕方に各家から漂ってくる煮物の匂い。
・早朝のまきストーブ煙の匂い。

四. 手足によみがえる感触
・草刈りの時の草の香りと暑さ。
・冬の下り坂のツルツル。雪の積もったところのキュッキュッという足の感触。

五. 思い出の味
・前日に炊いたのをおにぎりにしたんだけどと出してもらったおにぎりが、とても美味しかった。
・回覧板を持って行くと、ついてきた子供にお佛壇のおかしをおさがりでいただいていた。
六. 方言、唄、言い回し
・女性の既婚者に対し「ねーさん」と言う。
・他家を訪れるとき、ごめん下さいではなく「こんにちはー（＼／＿↘）」と声をかける。
七. 当地における「キノコ」
④「あぶらぼん」と聞いて思い出すこと
・やぶこぎで取り組んでいるが、ぜんぜん出ない。松の木がもっと増えないといけないのでは？

■四十九歳　女性
守山地区におよそ四十年間住んでいます。
一. 目に浮かぶ風景
・夏休みに湖西線の高架下に螢がたくさんいて見に行った。
・家がこんなに沢山建っていなくて、北船路まで行く道のりが雑木林だらけで恐かった。
二. 耳に残る音
・冬の朝に車のチェーンの音が聞こえたら、雪が沢山降っているのだとわかった。
三. なつかしい匂い
・赤潮の時のくさい臭い。
・下水がなかったので、どこの家もどっぽん便所だったので、汚水の臭いは普通にあった。
四. 手足によみがえる感触
・山に行った時に、沢ガニをつかまえた時の水の冷たさや、石をのける作業や沢ガニにはさまれた時の痛さなど。
五. 思い出の味
・わらびやつくしを、おばあちゃんと一緒に採って帰り、母に調理してもらい食べたこと。
七. 当地における「キノコ」
④「あぶらぼん」と聞いて思い出すこと
・言葉を聞いたことはありますが、食べた記憶はないです。

■二十一歳　男性
守山地区に　二十一年間住んでいます。
一. 目に浮かぶ風景
・竹ヤブ、廃テニスコート、廃屋を遊び場にした。多くはとり壊されたが、それは地域にとっては良い兆候なのだろう。
二. 耳に残る音
・駅の旧チャイム
三. なつかしい匂い
・牛フンの匂い
四. 手足によみがえる感触
・小川の冷たい心地良さ
・神輿の重さ
五. 思い出の味
・ゴリの煮付け
・ブラックバスの天プラ
・栗
・どこかの家のイチジク
・コアユ
六. 方言、唄、言い回し
・江州音頭
・祭礼の時の歌がかつてあったらしい

第五章　地域めぐるスタンプラリーと里山資源カード

五－一　概要

新型コロナウイルスによる社会情勢を受け、守山地区でも二〇二〇年四月から地域の主な活動が自粛された。五月三日に行われる五箇祭も二〇一九年度から神輿渡御を取り止める方針が出されて新たな榊祭りの形態を作り出す過程であったが、儀式はごく簡略化した式典のみが役員で行われた以外は中止された。二〇二一年も引き続き、地域の夏祭り、地蔵盆、運動会、老人会やお寺の催事、地域総出の農道整備や山道の確認などの行事など、地域の人々が顔を合わせる機会が制限されてきた中、少しでも皆が顔を合わせ、地域を知り、楽しむことができる企画として「守山スタンプラリーde抽選会」が実施された。実施する過程で自治会と足並みを揃えて、里山科研が準備・制作物を担うことになった。

五－二　「守山自治会」

守山自治会は、全戸二二四戸。そのうち、一九五〇年以前からの旧守山地区の戸数は五八戸となっており、その後昭和六十年代に地荒谷川を修復し周辺の荒地が宅地開発され、また、共有山を開拓し新興住宅地「風の丘」が設置された事により増加した新住民は一六六戸となる。（二〇一九年調査時）自治会長・副会長・会計三役。自治会・議会・公民館の運営を行う。自治会を二十九の「隣組」に分け、そ

れをA－Dの四ブロックに分ける。ブロック代表に選ばれた評議員は自治会が行う議会に出席する。新規住民が副会長を担うなど、新旧合同での自治運営が行われている。

五－三　「守山スタンプラリーde抽選会」

日時：二〇二一年十一月十四日（土）
主催：守山自治会

守山地区の旧集落に点在する自然・歴史・文化的な価値がある場所へ地域住人に訪れてもらい、旧住民・新住民が共に地域の魅力を体験・共感する場を創出することを目的に企画された。コースは三つ。受付である守山公民館でスタンプ台紙をもらい、「お散歩コース」（ポイント三箇所）、「入門コース」（ポイント五箇所）「覇者コース」（ポイント五箇所）から選んで、コースを巡る。それぞれの訪問ポイントには老人会の皆さんが待機し、クイズが出される。クイズに正解しスタンプを集める。コースを巡り終えたら受付に戻り、各コースの抽選に参加ができる。最終地点の守山公民館では参加賞として景品や「守山・里山資源カード」が配布された。

当日は晴天に恵まれ、子どもも大人も多くの住民が和気あいあいと参加した。複数のコースにチャレンジする人も多く、三つのコース全部（ポイント三箇所は二つのコースで重なっているためポイント十箇所）をコンプリートする子どもたちなどで夕刻の守山公民館はひとしきり沸き立った。（写真31～35）

写真32　地図を片手に子どもも大人も集落内のポイントを巡る

写真31　守山スタンプラリー受付、スタート！

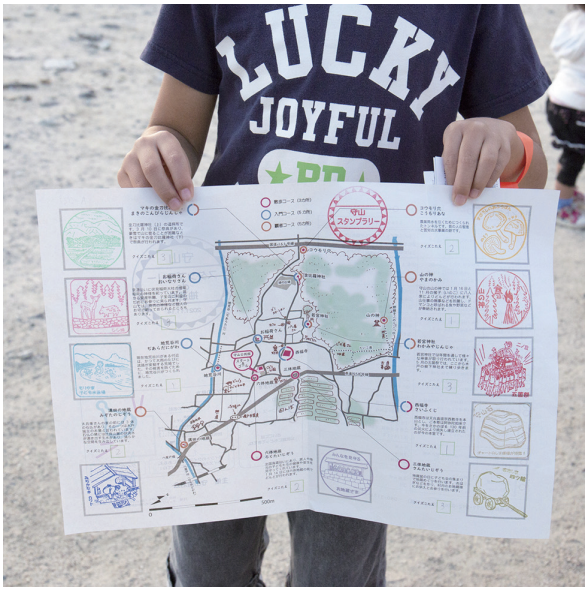

写真34　三つのコースを全部回ってコンプリート！

写真33　クイズに答えてスタンプを集める。手描きのイラストが好評

写真 35　賞品や守山・里山資源カードをもらえる

五－四　守山を歩いて・感じて・楽しむスタンプラリー

（一）スタンプラリーのポイント設定

まず初めにポイントの設定が必要だった。ポイントの選択には文献資料および実地調査を行ない、「道標・常夜灯コース」、「地蔵めぐりコース」「年中行事コース」「防災の歴史コース」「水をめぐる歴史コース」「新たな拠点コース」の六コース三十五箇所のポイントを提案した。自治会役員会にて「子どもや高齢者の行動や、二～三時間で巡ることができる範囲、県道五五八号線（旧国道一六一号線）をまたがない」という条件で巡ることができる十箇所にポイントをしぼり、最終決定された。

（二）ポイント解説文・クイズ作成

十箇所のポイントの解説文章は、文献資料や聞き取りから作成。クイズは、守山の自然と人との関わり、人々の暮らしを主題とした。お地蔵様の顔や姿を観察したり、道標の文字を推測したり、樹木をみて名前を考えるなど、現地で情報を得て、その場で経験を通して答えを導き出せる設問とした。監修は自治会役員会により行われた。

（三）デザイン制作

里山科研として、様々なデザインを担当した。地域の自然・歴史・文化的価値を伝えるための親しみやすさ、利用する年齢幅が小学生から高齢者と広いことに配慮したわかりやすいデザインとしてイラストを盛り込んだ地図やスタンプを制作した。「スタンプラリー台紙（地図）」「スタンプ」「守山・里山資源カード」のデザイン・編集は大原が担当した。

●スタンプラリー台紙（地図）

ベースの地図やデザイン、構成など、自治会役員会で何度も確認し、ブラッシュアップを行った。巡るコースがわかりやすいようにポイントの配置やデザインや色を工夫した。文字情報が子どもやお年寄りも読みやすいように、フォントやサイズ選びを行った。地図のベースデータに、地域の灯籠や柿やクヌギの巨木・お店などのイラストを挿入したことで地域の特徴を視覚的に伝え、温かみのあるデザインとなった。（図2）

●スタンプ（十個）

スタンプの題材は、守山の自然と人との暮らしと歴史・文化的景観を伝えるものとして、「守山石」「蓬莱山と棚田の風景」「琵琶湖（子ども水泳場）」「どんど」「五箇祭神輿」「六体地蔵様」「石出し車」「あぶらぼん」「カワト」「シシ垣」を選定し、手描きイラストで制作した。（図3）

●守山・里山資源カード

スタンプラリーの参加者が、この企画を通して訪れた場所との出会いを当日だけで終わらせることなく、情報を持ち帰り、家族に伝え、記憶に残していくことを目的に制作した。地域に残る伝承や歴史的記憶、自然と対峙して暮らし育んできたもの、世代を越えて引き継がれてきた信仰や行事、それらの時間が景観となってすぐ身近な日常の中に現存し、大切に守られ活用されていることを伝えていくカードとなった。写真撮影は永江が担当。単に説明図版ではなくその場所の魅力や歴史的背景が伝わる写真になるように意識して撮影した。体裁は、名刺サイズ、表面に「メイン画像」、裏面に「場所名、解説文、画像一～二枚、画像撮影日、画像撮影者」を記した。（図4）

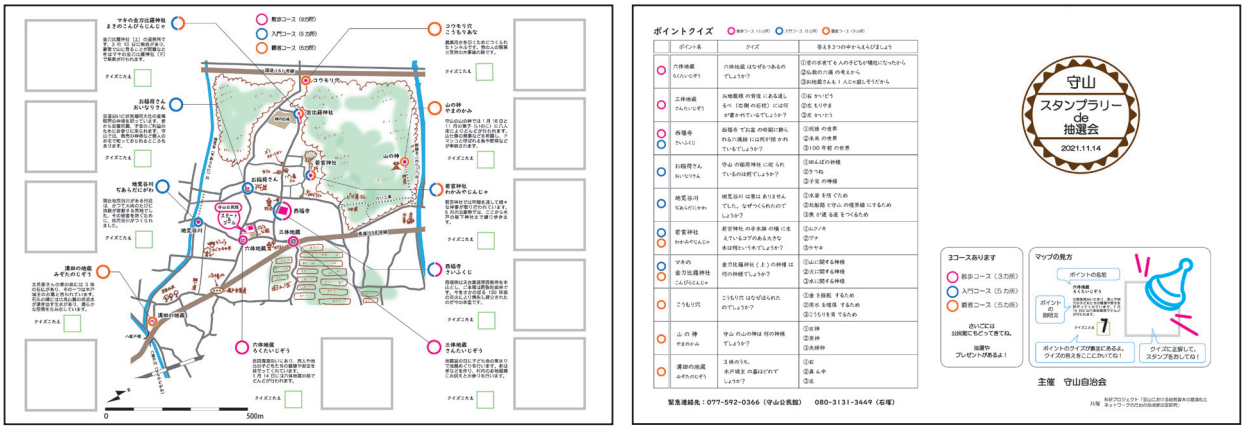

図 2　スタンプラリー台紙（ポイント解説、イラスト地図、地域の歴史・自然クイズを掲載）

図 3　守山の自然資源をテーマにしたスタンプ

図 4　守山・里山資源カード（一部）

第六章　比良山麓の石の文化サイクリングマップ

六－一　概要

本章は、「ＮＰＯ法人比良の里人」と里山科研が取り組む「比良山麓の石の文化サイクリングマップ」の制作について報告する。活動は現在進行中で、途中経過の報告となる。

六－二　「ＮＰＯ法人比良の里人」について

「ＮＰＯ法人比良の里人（以下、「比良の里人」という）」は二〇〇五年に設立され、三十～七十代の地元農家、造園業者、民宿経営者、移住した研究者や会社員など十数名の会員（女性は三割ほど）で構成される。比良山麓の豊かな里山の自然と景観を活かした新たな資源利用、管理、普及啓発などを目的とした活動を行ってきた。「比良の里山の魅力探訪」として地域の自然・歴史文化のある場所を歩く企画、伝統的な集落で使用される用水路を修復する「石積みの川復活プロジェクト」、旧志賀町の伝統と地域の魅力を次世代へ伝えるための活動「近江舞子の内湖活性化と環境学習」など、会員が自ら地域での体験を通して、里山の持つ潜在的価値を知り、「比良の持つ有形無形の様々な地域資源を活かす」ための活動が実施されてきた。公共事業のあり方や、文化的景観の保全・活用などに関して、会員の専門知識や技術を活かした活動を展開しており、行政や国内外の市民組織などとの交流もみられる[註6]。団体名には「比良の景観を愛し、その麓に暮らす〝里人〟として人と人のつながりを大切にしてゆきたい」という思いが込められている。（二〇二〇年度調査時会員数十二名）

六－三　比良山麓の石の文化

比良山系の東麓では標高一〇〇〇メートル程の山頂から急斜面が連続し、大小様々な河川が琵琶湖に流れ込んでいる。山麓に暮らす人々は、自然災害に対処するための様々な工夫を行ってきた。集落周辺の山や河川から産出される花崗岩やチャートなどの石材は、災害を防ぐための堤や水路、波除石のほか、シシ垣、棚田の石積みに利用されている[註7]。また、江戸時代から採石や加工が行われ、集落内には住宅の基礎石、道標、石灯籠などの様々な物に使われ、現在も地域を歩くと現存する。このような自然の脅威や恵みとの対峙をした「目に見える記録」として、比良山麓に現存する石の文化的景観とその暮らしを記録し、歴史やその技術を次世代に伝えていく活動が始まっている。

六－四　比良山麓の石の文化サイクリングマップ

比良山麓から産出される比良石を使用した様々な造形物がある町並みや風景、地域に伝わる技術、自然と向き合い共生してきた暮らしなどに出会うサイクリングマップを作成する。地元に自然・歴史・文化的価値のある造形物や風景があることを普及させることを目的に、地元の小学校や中学校をはじめ地域の活動での使用を想定。また、湖西でもインバウンド（訪日外国人旅行）の受け入れがコロナ禍に見舞われる前には盛んになってきていたので、そういった旅行者も視野に入れて琵琶湖を見渡す丘陵地など湖西を巡るコースとして提案することを考えている。

・マップの範囲：比良山麓の湖岸までの地域。ＪＲ湖西線北小松駅～和邇駅

・「山の辺コース」と「湖辺コース」の二コースのポイント選定

六－五　制作の経緯

・二〇一九年度：比良の里人により「比良の地域の織り成す石の文化」のポイントが選出され、比良山麓を通る「山の辺コース」と、内湖付近や湖岸を通る「湖辺コース」のコース作りが行われた。

・二〇二〇年、二〇二一年度：ポイントおよびコース確認、現地取材、石の文化研究者によるレクチャーなどを行った。また、比良の里人のメンバーで石工職人であるＨさんに、南小松の石材産業の歴史や石材の採掘、加工について聞き取り調査を行った。

コロナ禍で活動が制限・延期される中、現在継続中で取材や制作を進めている。比良の里人のメンバーの中には、守山地区在住で守山里山の会に参画している方もおられ、マップ制作が思うように進められない中でも様々な活動で顔を合わせお互いの状況を伝える機会があることが良好な関係性を保つことにつながっていると感じる。

写真 37　比良の里人の総会で提案した石の文化のスライドより「南小松」

写真 36　比良の里人の総会で提案した石の文化のスライドより「北小松」

写真 39　比良の里人の総会で提案した石の文化のスライドより「北比良」

写真 38　比良の里人の総会で提案した石の文化のスライドより「大物」

結び

大原は二〇一八年度から、永江は二〇一九年度から里山科研に関わり研究活動を進めてきた。本稿で報告したどのプログラムにも共通するのは、地域住民の方々と共に地域に顕在・内在する価値や課題を認識し、研究成果を共有するプログラムとして実施してきたことである。多くは地域が主体となって進めた企画に沿って研究活動を実施してきた。そのため研究期間が終了しても、それぞれの活動は地域住民によって継続して行われていくことになっている。

コロナ禍で地域の様々なイベントや外出・移動が自粛や延期を余儀なくされ、人と会って話をするというごく当たり前のことすら慎重にならざるを得ない社会情勢が二〇二〇年一月以降二年以上続いている。本研究も地域の実情などに合わせて活動内容を変更せざるを得ず、研究期間も一年延長された。そうした中でも、日々の暮らしや生業は状況に合わせて営まれ、人々のつながりもまた継続されてきた。もしかするとコロナ禍が終息した後、今この数年が地域や人の営みが大きく変化せざるを得ない転換点になるのかもしれない。そうした変化の中で、里山における価値感や地域のネットワークをよりよく、より発展的につなげていく一助として本研究の成果を地域に還元していければと願っている。

本研究を進めるにあたって、地域の多くの方々や協力団体のみなさまに多大なお力添え、ご協力をいただいた。深く感謝の意を表したい。

本調査報告書は、JSPS 科研費 JP18H0227（科学研究費助成事業（基盤研究（B））「里山における自然資本の意識化とネットワークのための地域参加型研究」）の助成を得て執筆しました。

註

1. 本研究の先行研究・研究への経緯として、里山の定義・位置付けとして、深町加津枝「里山研究の目指すもの 里山とは―その構造と地域性―」『森林科学』四十二巻　四－九頁　二〇〇四年　より引用。

2. 科学研究費助成事業（基盤研究（B））「里山における自然資本の意識化とネットワークのための地域参加型研究」：研究代表者：深町加津枝／京都大学：里山における「自然資本の意識化」と「ネットワークの創出」にむけた「地域参加型研究」を行い、地域社会にある里山の自然資本を自立的に再生、活用するための具体的な空間計画、地域デザインを検討することを目的とするものである。（二〇一八～二〇二一年度　社会情勢を受け一年繰越）
永江：二〇一九～二〇二一年度　研究分担者
大原：二〇一八年度　研究協力者、二〇一九年度　研究分担者、二〇二〇～二〇二一年度　京都大学大学院技術補佐として従事

3. 守山地区の変遷：明治七年（一八七四）五月－守山村と北船路村が合併し八屋戸村発足。その後、明治二十二年（一八八九）四月一日－町村制の施行により、南船路村・八屋戸村・木戸村・荒川村・大物村・南比良村の区域をもって木戸村発足。昭和三十年（一九五五）十月一日－和邇村・木戸村・小松村が合併して志賀町発足。平成十八年（二〇〇六）志賀町が大津市へ編入。

4. 対談 石塚定二郎×大岩剛一（近江学研究所客員研究員）「石出し車が行くみち―神々と暮らしが交差する風景―」文化誌『近江学』第九号　二十八－四十一頁　二〇一七年

5. 二〇二〇年十二月、石塚定二郎さんがお亡くなりになり大きな道標を失ったような気持ちになった。入退院を繰り返しながら、退院されては私たちに話をしてくださった。定二郎さんが残した貴重な民具・道具、書物、書き記した文章などについてご家族と相談させていただき、引き続き調査を継続することになったのは大変有難いことである。

6. 深町加津枝・奥 敬一「大津市比良山麓の自然資源利用と里山の暮らしの価値に関する考察」『景観生態学』二十一巻　第一号　三十三－四十一頁　二〇一六年　より引用

7. 総合地球環境学研究所 Eco-DRR プロジェクト『比良山麓石工鳥瞰図』二〇一九年　より引用

参考文献

・石塚定二郎『守山村の歴史』改訂版　十一頁　二〇一九年
・木戸小学校百周年記念委員会『木戸の里　歴史めぐり』一〇六頁　一九七四年
・落合知帆「水害対策に対する石の構造物と伝統知―滋賀県比良山系を事例として―」『日本都市計画学会都市計画報告集』第十八号　三九八－四〇一頁　二〇二〇年
・志賀町史編集委員会編『志賀町史』全五巻　一九九六年一月－二〇〇五年二月